

広島大学留学生センターの設立

浮田三郎

はじめに

二十世紀末十年代突入の年に、東京大学と京都大学と広島大学に留学生センターが設立されたということはまだ記憶に新しいであろう。が、この設立の導火線と原動力になったのは、広島大学教育学部の「留学生日本語教育ユニット」の「日本語教育・研究センター設立の提案」であったということは、あまり知られていないかも知れない。また、その導火線がどのように燃えていったかは、恐らくほとんど知られていないであろう。

そこで、本誌3号では、留学生センターが設立された年を記念して、何か特集を組むことになったが、特集と言うほどのことはできそうにないというので、ともかく、一応、当センターが設立された過程を、何かの形で記しておこうということになった。その当りくじを引いたのが、この私である。力不足とは思いつつ、反省も込めて、以下にその過程の一部、特に日本語教育に関連した部分を中心に、記してみたい。

1. 留学生センターと日本語教育

1) 留学生センター設立

広島大学の留学生センターは、日本語教育部門と留学生指導部門が組織され、それに合わせて事務組織が編成されて、1990年6月8日に発足したが、それは、広島大学の日本語教育の伝統と実績の上に設立されたと言えるであろう。

即ち、広島大学では、1975年からそれまで、教育学部の「日本語・日本事情」（講座相当）が、広島大学に在籍する外国人留学生に対して、各種の日本語と日本事情の授業を開設（後述参照）していたのである。また、1980年には、教員研修留学生のプログラムが始まり、以来教員研修生のための集中的な日本語授業も「日本語・日本事情」が担当してきた。さらに、1985年には、教育学部に「日本語研修コース」（後述参照）が設置され、同年10月、6カ月毎の日本語の集中授業が始められた。そして、それ故に、「日本語・日本事情」と「日本語研修コース」の部門が、日本語

教育に関わる側面から、色々と留学生の世話を引き受けてきた。

このように、広島大学の日本語教育の歴史は古く、その歴史の遺産の上に同センターが設立されたことになる。即ち、「日本語・日本事情」と「日本語研修コース」の部門が、その実績の基に、当センター設立の柱となったのであり、設立の準備に当たっては、日本語教育の現状分析や留学生教育の将来構想の中心的な役割を担ってきたのである。

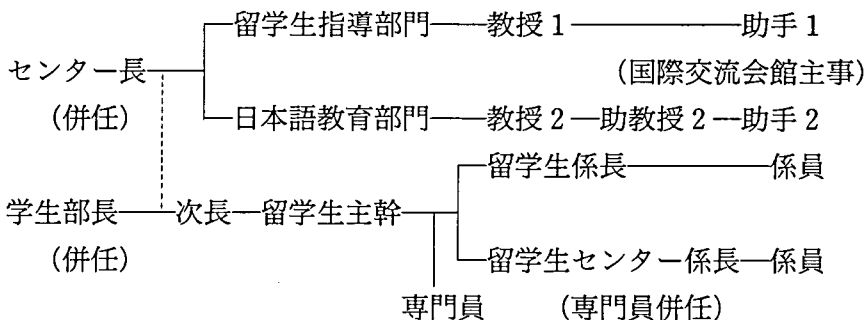
なお、指導部門には、教授ポスト1が純増され、形式的にはその下に助手の立場で、国際交流会館主事が置かれているが、この部門としては、「ただ今機能し始めた」ばかりである。

2) 留学生センター事務組織

当センター設立に際して、当センターに関わる事務組織も新たに編成されているので、それと広島大学の関連事務組織を簡単な表にして掲げてみよう。

建物面積：805m²（教育学部棟2，3階の一部を専用）

組織体制：



(注) 留学生センターは、東広島市の教育学部棟内にあり、留学生センター係は、同市の国際交流館内で業務を担当しているが、その他は全て広島市の東千田キャンパス内にある。

3) 留学生の受け入れ体制

留学生は、学部あるいは大学院の入学試験に合格して入学してくる留学生の外に、各種色々な研修生が受け入れられる。そのような留学生の受け入れは、基本的には、留学生を引き受ける指導教官の了解のもとに各学部の教授会の議を経て、研究生として受け入れられているが、大学全体の留学生の受け入れ体制としては、広島大学の国際交流委員会の学生交流専門委員会が機能している。特に、各種国費留学生の受け入れと私費留学生に対する各種財団の奨学資金受給者の決定に関わる議は当委員会で行われている。

このようにして受け入れられる留学生の各種事務手続きは、その事務内容に応じて、留学生を中心にして、大学全体の学生係、各学部の事務部門が、担当している。

4) 留学生指導部門

この部門は、異国の空の下で研究生活を送っている留学生達にとって、もっともっと整備されていかなければならないであろう。ここは、上にも述べたように、機能し始めたばかりであるが、次のようなことを主要務とする。

外国人留学生に対して、修学及び生活に関する指導や助言（アドバイス）をする。又、海外留学を希望する日本人学生に対して、指導や助言を与える。

5) 日本語教育の理想とセンター設立

(1) 留学生センター設立の萌芽

留学生センターの設立の動きは、1987年に遡る。それは、当時の教育学部の学部長の、当時の日本語教育の現場を、留学生と教官の側の両面から見て、より理想に近い形にしたいという願いからの出発であった。もちろん、私達もそう願っていた。日本語教育に携わる教官達の間でも、当時の状況を改善しようとする試みは、折りに触れ試みられてきていたからでもあるし、広島大学に、「日本語研修コース」ができ、「日本語教育学科」が教育学部に設立され、広島大学の関係者の間では、広島大学が西日本の日本語教育のメッカとなったような雰囲気され感じられてきたころのことであったからでもあろう。

(2) 広島大学教育学部内留学生日本語教育・研究センター設立準備委員会

日本語教育関係の教官は、日本語教育の理想を掲げて、二匹目三匹目のドジョウを夢見たのである。伝統ある教育学部の中に、日本語教育学科と密接な関連を保ちつつ、国際社会での重要な役割分担の一つとしての留学生の日本語教育を中心とした教育・研究機関ができるはずであった。私達は、これまでなされてきた日本語教育をより体系的で充実したものにするために、当時の留学生の数や種類とその多様性や彼らのニーズ等を調査し構想を練った。しかし、余りにも多様な留学生に対応できるような理想型の実現は、不可能なように思えた。

1988年には、教育学部内に「日本語教育・研究センター設立準備委員会」なるものができ、学部長初め私達関係者は、何度もワーキング委員会で検討を重ね、東京広島間のファックスと競争しなければならない夕刻も何度となくあった。その年の夏頃には、打ち出されたワープロ原稿も、木枯しを待たずに、何枚となく散っていった。余りにも多様な留学生を抱えているという現実と、それに対応するための理想的なスタッフの補充は、現在の日本の大学の制度からみても実現は不可能に近かった。また、文部省の側からは、留学生の世話体制が強調され、それには「研究」という文字は不必要だとの示唆もあったようであるが、それまで教育学部の教官スタッフとして活動してきた関係者は、それまで考えてきた日本語教育の理想型とは異なるとして、大いに反対した。「研究」が在ってこそ、留学生の教育体制が整うの

であり、研究体制の整わないセンターは、考えられなかったのである。

(3) 広島大学留学生日本語教育・研究センター設立準備委員会

このような議論が重ねられる中で、1988年の晩秋から1989年の早春にかけて、教育学部内ではなくて大学全体のセンターとしてならスタッフの増員を含めて設置される可能性が示唆された。教官の振替の問題と同時に「教育」「研究」「指導」といった文字をどうするかという問題もあり、また、議論沸騰したのであった。しかし、趨勢は、既に、当事者達の意志や当初の理想型とは異なっていた。

こうして、1989の春から、新たに大学全体で組織される「留学生教育・研究センター設立準備委員会」ができ、センターの教育・研究体制に関する議論は、「設立に向けて」という名のもとに、やや高みに昇ってしまい、いざとなると現場の関係者の声が充分には届きにくい状況になっていた。

(4) センター設立と課題

主題は、「新しいものを設立するかどうか」で、当初の「理想的な日本語教育と留学生指導の問題」は、二の次に置かれてきたようであった。ともかく、本会議では、当センターが「理想的な教育と研究の場にならなければならない」ということは確認されたのではあるが、結果的には、日本語教育の側から主張してきたことはほとんど実現しなかったのである。看板からは、「研究」の文字が消され、いつの間にか「教育」の文字まで消えていたし、教官に関しては、指導部門に一名の増員は在ったものの、日本語教育部門は、教育学部時代を考えるとマイナスであった。本センターは、特に日本語教育部門は、それまでの教育学部の「留学生日本語教育ユニット」の行っている教育研究体制を踏襲し、それをより理想に近い形で進展させることを目的とするということは本会議で再三確認されている。にもかかわらず、図面の上では大きかった城は、内堀、外堀を埋められ、実際に設立されたときには、事務部の方も、本会議での決定とは異なり、本当にこれでセンターの事務処理ができるのであろうかといぶかる程の定員しか配置されなかった。移転の過渡期にある現実を考えると、なおさらである。

敢えて、反省を込めて、こんなことを述べてみたが、これは、西条盆地を吹き抜ける木枯らしに負けないように、理想的なより体系的で充実した日本語教育と留学生指導のできるセンターを営んでいかなければならないと思うからである。

3. 留学生の日本語教育

1) 留学生日本語教育の歴史

広島大学の留学生の日本語教育の歴史は、本誌1, 2号に詳しく述べてあるので

そちらも参照して欲しいが、ここにも簡単にそのあらましを述べてみよう。

広島大学では、1974年頃に日本語教育の萌芽が見られる。

1975年には、教育学部に「日本語・日本事情」（講座相当）が設置され、以後本年6月まで、この部門が広島大学に在籍する留学生に対する正規の外国語授業の代替授業として、人文社会系の振替授業として、また広島大学の学部や大学院に在籍する各種外国人研究生のための補習授業として、日本語と日本事情の授業を開設していた。

1980年には、教員研修プログラムが始まり、以来教員研修生のための集中的な日本語授業も「日本語・日本事情」が担当してきた。

さらに、1985年には中国・四国地方の各大学院に配属予定の研究生に対する予備教育のための「日本語研修コース」が設置され、同年10月、6カ月毎の日本語の集中授業が始められた。

広島大学の日本語教育の歴史は、かくの如く古い。

そして、1990年6月8日、15年以上の実績をもつ「日本語・日本事情」と「日本語研修コース」の部門が、当センターの日本語教育部門へと移行したのである。このように、広島大学の留学生のための日本語教育の中心は、教育学部から当センターに移ったことになるが、日本語教育は、今のところ従来と実質的にはほとんど変化はないと言える。当センターの日本語教育の担当教官も元「日本語・日本事情」と「日本語研修センター」の教官がそのまま振り替えられた。したがって、当センターの「日本語教育部門」が、これまでと同様、広島大学の留学生のための日本語教育に携わることになり、現場で得られる日本語教育の現状の分析や方法論の研究や留学生教育の将来構想の検討なども併せて行っていくことになるであろう。

但し、当センターには教授会が組織できなかったもので、従来の「日本語・日本事情」の授業は、実質的には当センターが担当するが、形式的には教育学部に残る形となり、色々な面で煩雑な事柄が多く各方面に迷惑を掛けている。

2) 日本語教育の実施状況

現在の留学生総数は480人以上で、その内50%前後の留学生がなんらかのかたちで当センターの日本語教育を受けている。そして、現在は日本語の授業を受けていない留学生も、その多くは、以前「日本語・日本事情」あるいは「日本語研修コース」の授業を一度は受けている。

現在の日本語教育の実施状況は、留学生それぞれの専門分野、留学目的、本人の興味等の違い、年齢差、能力の差等を考えると、実に多様であり、したがって、このような多様な留学生に対する限られたスタッフによる日本語教育の実状は、押し知るべしである。そして、前にも述べたように、実質と形式の複雑性の中にあっ

て、教育学部にあった元「日本語・日本事情」のカリキュラムと同様な授業と「日本語研修コース」を当センターが担当している。それを簡単に述べてみる。

前者では、

①学部生に対する正規の外国語授業の代替授業、

②人文社会系の振替授業、

③広島大学の学部や大学院に在籍する各種外国人研究生のための補習授業として、しかしながら①②③は合同で、留学生全体をプレイスメント・テスト等で、日本語の能力別に分け、初級（週、西条8、千田4時間。以下同様）、中級（12、6）、上級（12、6）、日本事情（8、4）の授業を開設している。また、

④教員研修生のための6カ月間日本語集中授業（半年450時間）、
さらに、

⑤日本語日本文化研修生のための特別講義（年間56時間）
も、大学内外から特別講師を招いて、行っている。

後者では、⑥中国・四国地方の大学院で研究予定の研究生のための予備教育として、週35時間、半年で600時間の日本語の集中授業を行っている。

詳しくは、本誌1、2号及び3号の活動報告も参照されたい。

4. 留学生センターでの日本語教育の課題

1) 日本語教育の課題

先にも述べたように、このように多様な留学生に対する日本語教育の課題には、スタッフの問題等様々なことが挙げられる。

留学生の多様性には、上記の事柄に、国費か私費留学生かということも、彼らの修学時間とも関係して、問題になってくる。また、彼らが、学部生か大学院生か研究生か教員研修留学生か日本語日本文化研修留学生（か外国人講師、外国人客員講師等）かによってもコース・デザインやカリキュラム作成上いくつかの問題を抱えることになる（浮田、「広島大学学内通信」、No261,1988、本誌1号、1988 参照）。さらに、留学生の家族受け入れは、現行の制度では認められていないので、民間団体などの日本語教室を紹介せざるを得ない。

スタッフの問題では、現状に見合う（留学生全体数に対するというより留学生の多様性に対する）スタッフの不足である。即ち、留学生受け入れの現状が肯定されたとすれば、専任、非常勤講師の雇用割当が不足しており、さらに日本語教育の専門家、非常勤講師が広島地方に不足しているという問題も重大である。また、日本語の授業を東広島市（西条）と広島市（東千田）の二箇所で行わなければならない

こともスタッフ不足に輪を掛け、様々な授業関係の連絡をするにも困難な状態である。これに関しては、統合移転の過渡期を指摘されるかも知れないが、統合移転後も医学部、歯学部は広島市に残留するので、問題は依然残されるであろう。

併せて、事務組織に関しても、事務官の不足が挙げられ、これは、統合移転の過渡期にあってさらに悲惨である。

したがって、前掲①～⑥の授業の時間数や能力別のクラスのあり方等、体系的な授業の構成は、非常に難しいと言わざるを得ない。

2) 問題点の改善策

ところで、このような現状を改善していくことができるであろうか。国立大学日本語教育協議会等でも、毎年同様なことが議論され蒸し返されているようであるが、なかなかすぐには「答申」といったような形にもならず、そこで問題点に対して提案される改善策も、なかなか実現していないようである。

しかし、もし改善策があるとすれば、やはり、上記の協議会等で提出されたような改善策位しか無いかも知れない。次のような改善策が可能であろうか。ともかく提案だけはしてみよう。

現状のままの留学生受け入れを肯定しなければならない場合は、①スタッフの充実を測る、と同時に、②留学生の意識を改善する必要がある。そのことにより、③従来の自由参加的なクラスのあり方を改善する。

あるいは、留学生受け入れの現状を改善する。即ち、④受け入れる留学生の日本語能力の水準を決める。あるいは、⑤「日本語能力は必要なし」という条件で受け入れられた留学生達の面倒は、受け入れたところが責任を持つということの再確認をする。また、⑥研究生の留学意識（遊学ではないという）の改善も必要であろう。

このようなことは、考えてみれば当たり前で、基本的なことであるが、これらの改善策が取られれば、より体系的な日本語教育の構成が可能となり、より充実した日本語教育が可能となるであろう。

5. 留学生センターの活動と将来

当センターでは、以上述べてきたような留学生の日本語教育を中心に、色々な面から留学生の教育に関わっていかなければならず、留学生の修学指導やその他の世話もみていかなければならないのである。そのためには、より充実した教育・研究・指導体制が整備されなければならない。不十分ながらも歩だしたセンターではあるが、色々な機関とも協力し合って、次のような研究活動と刊行を行っていくことになった。

例えば、次のような日本語教育と国際理解に関する研究活動をする。

1. 日本語・日本文化に関する教材とカリキュラムの研究・開発
2. 教授法の研究・開発
3. 教育の評価法と標準テストの研究・開発
4. 学生の異文化適応の研究
5. 指導と助言の方法の研究・開発
6. 外国人留学生の受け入れ方法の研究

又、次のような刊行物も、発行していく。

学術刊行物

1. 広島大学留学生センター紀要，広島大学，年刊
2. 広島大学留学生日本語教育，広島大学，年刊

その他の刊行物

1. 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集，広島大学，年刊
2. 広島大学生生活 -留学生用重要情報- ，広島大学，年刊
3. センター広報，広島大学，年二回

当センターの将来は、かくの如く多くの重要任務と多くの問題点と課題を抱えており、さながら高波の大洋に漕ぎ出した桃太郎の宝船のようでもある。多くの宝物を積んではいるが、何時側面からあるいは正面から突風や高波に見舞われるかも知れないのである。上手に舵をとって、日本理解のために、国際理解のために、そして世界平和のために、航行しなければならないのである。

(*) 最後に、当センターの概要を英文で簡単に掲げておこう (cf. Hiroshima University Bulletin)。

(*) The Brief Information for the Institute in English.

INSTITUTE FOR INTERNATIONAL EDUCATION

Address: Shitami, Saijo-cho, Higashihiroshima-shi

Telephone: 0824-22-7111

Director: KAWAI, Iroku, D.Litt.

This Institute was officially established on June 8th 1990, as the institute for teaching Japanese and providing advice and counselling service to foreign students. The same kind of institute has also been simultaneously established in Tokyo University and Kyoto University.

Up to this time, in Hiroshima University, there were two divisions in the

Faculty of Education for teaching Japanese to foreign students, viz. “Japanese Language & Japanese Culture” and “Intensive Japanese Language Training Course”. The former started in 1975 and the latter in 1985. In the organization, they have become the centers of the institute as the “division for teaching Japanese Language” while simultaneously another “division for advising and counselling” has been established.

EDUCATION AND RESEARCH ACTIVITIES

JAPANESE EDUCATION

The Institute provides various kinds of lessons for foreign students in Hiroshima University, to help them to accomplish their aims and spend their lives significantly in Japan. The courses for Japanese education roughly consist of the following;

1. Japanese Language and Japanese Culture

SAIJO CAMPUS:

Elementary Japanese I, II, III, IV (Drill)

Intermediate Japanese I, II, III, IV, V, VI (Lecture, Drill)

Advanced Japanese I, II, III, IV, V (Lecture, Drill)

Elements of Japanese Culture and Customs I, II, III, IV (Lecture, Drill)

Intensive Japanese (for In-service Teacher Training Students)

SENDA CAMPUS:

Elementary Japanese I, II (Drill)

Intermediate Japanese I, II, III (Lecture, Drill)

Advanced Japanese I, II, III (Lecture, Drill)

Elements of Japanese Culture and Customs I, II (Lecture, Drill)

2. Special Program of Japanese Culture and Customs

(Lectures and Research Trips)

3. Intensive Japanese Language Program

The Intensive Japanese Language Program is a 6 month program which is offered exclusively for the Monbusho Scholarship students whom Monbusho requires to learn Japanese intensively before starting graduate work at national universities in the Chugoku and Shikoku areas.

ADVISING AND COUNSELLING SERVICES

The Institute is ready to give advice and counselling services to foreign students concerning their study and life in Japan; and to Japanese students who want to study abroad.

RESEARCH ACTIVITIES

The Institute covers research concerning International Education as follows:

1. development of teaching curriculum and teaching materials concerning Japanese Language and Japanese Culture
2. development of Teaching Methods
3. development of Educational Evaluation and Standard Tests
4. studies on Students' Adjustment to Foreign Culture
5. development of the Methods of Counselling and Advising
6. studies on the Methods of Acceptance of Foreign Students

ACADEMIC STAFF

Professors

KAWAI, Iroku, D.Litt. (Director)	Educational Psychology
UKIDA, Saburo, M.A.	Japanese Language and Linguistics
TAWATA, Shinichiro, M.A.	Japanese Linguistics

Associate Professor

NAGATOMO, Kazuhiko, M.A.	Japanese Language
--------------------------	-------------------

Assistant Professor

NAKAGAWA, Masahiro, M.A.	Japanese Language
--------------------------	-------------------

Research Associates

TAMURA, Yasuo, M.A.	Japanese Language and Linguistics
MINE, Masashi, M.A.	Japanese Language and Linguistics
TANAKA, Tomoko, M.S.	Psychology

ACADEMIC PUBLICATIONS

1. The Bulletin of the Institute for International Education, Hiroshima University (Hiroshima Daigaku Ryugakusei Senta Kiyo, Japanese, Yearly)
2. Journal of Teaching Japanese to Foreign Students, Hiroshima University (Hiroshima Daigaku Ryugakusei Nihongo Kyoiku, Japanese, Yearly)

OTHER PUBLICATIONS

1. Collection of Research Reports of Programm of Japanese Language and Culture (Nihongo Nihonbunka Kenshu Puroguramu Kenshu Repoto Shu, Japanese, Yearly)
2. Life at Hiroshima University—Useful Information for Foreign Students— (Hiroshima Daigaku Seikatsu—Ryugakusei-yo Juyo Joho— , English and Japanese, Yearly)
3. Newsletters (Senta Koho, English and Japanese, Occasional)